

2022年3月6日大齋節第1主日

申命記 26 章 5-11 節

ローマの信徒への手紙 10 章 8b-13 節

ルカによる福音書 4 章 1-13 節

教会庭の紅白の梅が満開です。以前勤務していた聖パトリック教会にも紅白の梅があったせいか、わたしには梅が咲くころは、大齋節というような感覚があります。さて、先週の水曜日からその大齋節に入りました。

大齋節は、復活日を迎えるための準備の40日間です。この40という日数は、『聖書』の中では特別な意味を持ちます。四十日四十夜という表現が、ノアの箱舟の物語（創7:12から13）や、シナイ山でのモーセへの律法の授与の物語（出エ24:18）などに見られます。また、出エジプトの旅路は40年です（申2:7）。本日のイエス様の荒野の誘惑の物語は40日です。また聖書では、一世代を40年と考えます。これらの様々な『聖書』における40という数の用法から考えますと、大齋節の40日という長さが意味することは、復活を迎える準備、それを日数に置き換えるならば、ひとつのまとまった日数が必要である、ということになると思います。

本日の旧約日課は、「申命記」です。文脈としては、40年に及ぶ荒野での旅路を終えたイスラエルの人々が、カナンへの地に入る際に起こると予想される様々な事柄に対する、対応について書かれている箇所です。「新共同訳」では、「信仰の告白」という小見出しがついていますが、新しい「聖書協会共同訳」では、「初物を供える」となっています。この箇所を中心をどうとらえるかによって、変わったということでしょう。

5節に「あなたはあなたの神、主の前で次のように告白しなさい」とあります。イスラエルの人々が、約束の地カナンに入るのは、主なる神様への信仰が関わっているからです。その意味では、この箇所の内容の中心を「信仰の告白」と言っても構いません。しかし、「新共同訳」では、「告白しなさい」と訳してとありますが、直訳すると、「答えて言う」あるいは「述べて言う」となります。似た動作を重ねて表現する「旧約」の特徴です。「文語訳」では「陳て（のべて）言べし（いうべし）」、「口語訳」では「述べて言わなければならない」となっていました。新しい「聖書協会共同訳」では、「こう言いなさい」となっています。「新共同訳」が意識したのです。ただし、この意識には理由があると思います。

また10節を見ますとそこには、『わたしは、主が与えられた地の実りの初物を、今、ここに持って参りました。』あなたはそれから、あなたの神、主の前にそれを供え、あなたの神、主の前にひれ伏し、あなたの神、主があなたとあなたの家族に与えられたすべての賜物を、レビ人およびあなたの中に住んでいる

寄留者と共に喜び祝いなさい」とあります。ここから考えますと、この箇所的主旨は、入ったカナンでの主なる神様から与えられた賜物を、自分の家族とレビ人と寄留者と共に喜ぶことの大切さを述べています。そして、そのことを忘れないために、賜物の「初物」を捧げなさいと述べられています。それは、主なる神様への信仰を忘れないためです。そのように考えますと、「新共同訳」の「信仰の告白」という小見出しは少し大げさかもしれませんが、的外れなわけではありません。

さて、その「信仰の告白」という点を見ていますと、最初の告白は、「わたしの先祖は、滅びゆく一アラム人であり、わずかな人を伴ってエジプトに下り、そこに寄留しました。しかしそこで、強くて数の多い、大いなる国民になりました」です。ここには二つの大切な事柄があります。一つは、「一アラム人」という表現です。「アラム人」と訳してありますが、これは民族の名前でも王国民の名称でもありません。アラム地方に住む人という意味です。その地域は、シリアとも呼べるので、文語訳では「一人のスリヤ人」となっていました。この表現が意味するところは、わたしは特別ではないアラムにいた遊牧民の一人であるということです。イスラエルも同じ遊牧民です。そのような人々が、主なる神様選ばれて、カナンの地を与えられるのです。しかし、それはイスラエルの特権ではなく、またイスラエルに何ら選ばれる根拠もありません。主なる神様がそのように決めたからに他なりません。主導権はすべて主なる神様にあります。「滅びゆく一アラム人であり」という表現は、そのことを意味しているのです。

次に大切な事柄は、「寄留しました」という表現です。この部分の翻訳はどの訳もほぼ同じです。この「寄留する」とは一定期間、自分の本来の住処ではないところに住むことです。ただし、忘れてはならないことは、「寄留者」である限り、その場所での権利や保護を持たないということです。主なる神様は、イスラエルに対して、約束の地に入るにあたり、自分が名もない遊牧民の一人であり、またかつてはエジプトで権利も保護もない寄留の民であったと告白し、そのことを忘れないようにしなさいと命じているのです。

さて、イスラエルという人々が、カナンの地に入ったことは、見方を変えて、入ってこられた方から考えてみますと、それは侵略です。しかし、本日の箇所が示すことは、これら二つの大切なことを合わせて考える時、イスラエルの侵略が、主なる神様によって許されたということではありません。大切なことは、イスラエルが、カナンの地に住むにあたって、謙虚さを求められているということに他なりません。その謙虚さが示すこととは、イスラエルがカナンの地に住むこととは、人間的な特権や能力の高さがあるからではなく、主なる神様が許されたからだということです。それゆえに、11節の言葉につながるのです。

「あなたの神、主があなたとあなたの家族に与えられたすべての賜物を、レ

レビ人およびあなたの中に住んでいる寄留者と共に喜び祝いなさい」。レビ人は、嗣業、すなわち土地を分け与えられていない人々です。祭儀を通してイスラエル全体に貢献する人々です。彼らは他の人が支えなければ、生活ができません。そして寄留者、これはかつてイスラエルがそうであった状態の人々です。寄留者である以上、土地からの賜物・産物を受けることはありません。この人々も、誰かが支えなければ、生きることができないのです。

主なる神様は、ここで分け合うことを命じています。主が与えられた土地であるからこそ、すべての賜物・産物を自分に権利がある所有物とするのではなく、嗣業をもたない同胞であるレビ人と共に分け合うこと、またその場にいる同胞ではない異なる人々とも共に、賜物・産物を分け合うことを命じているのです。これが、『聖書（旧約）』が示す、イスラエルの存在意義です。主なる神様が、イスラエルを通して、世界に示されようとしておられる意思です。

さて、本日の福音書は、イエス様が荒野で悪魔から誘惑を受ける箇所です。並行箇所がマタイ福音書にもあり、誘惑の順番は異なりますが、内容は同じです。誘惑の内容をまとめますと、食べること、この世の富と権力にかかわること、そして神様への信仰にかかわることとなります。それは言い換えれば、誘惑の内容が、個人的な事柄から、社会的な事柄、そして信仰的な事柄に広がっていることを示します。そして、一つひとつの悪魔の言葉は、非常に巧妙です。イエス様は、もちろん、どの誘惑にも負けることはなかったのですが、それは、イエス様が悪魔よりも強かったからではありません。そもそも、自己の強さを通して、悪魔の誘惑を退けるのは、困難だといえるでしょう。悪魔の誘惑の巧みさは、悪魔と取引してでも自分の欲望をかなえたいというような事柄もあると思いますが、誰かのため、あるいは世界の平和のためというような、善意の目標がある時に、強く働くからです。正義感の強い人ほど、悪魔の誘惑に負けることがあるからです。

先週、戦いが、決して悪を行うためではなく、平和、正義、救済、連帯など、正しいと思われる価値観や理想の実現を理由に、遂行されるということに触れました。最初から悪を行うという前提で、戦いが開始されることは少ないのです。戦いは、高い価値観や理想の実現を前提にして行われるのです。それが悪魔の誘惑といえます。

石がパンに変われば、飢えの問題は、今すぐ解決するかもしれません。絶大な富と権力を手にすれば、その力で世界を安定させ、あるいは一定方向に動かして、表面上は平和を実現させるかもしれません。もし人間を超える神的な力を示せば、世界の人々を魅了して、それに従わせることができるかもしれません。どれも使い方によっては、世界全体の平和に結びつくように思えるのです。しかし、その先に、すべての人が、互いに尊重しあい、互いに大切にしあい、幸せ

を他者と分け合う世界が、ほんとうに開けるのかということ、そうではないと思います。その力のあり方やその作用に反対の人は、排除されるからです。そのような現象は、歴史上起こった、あるいは今も起こっている全体主義的な歩みが、実証しているといえます。

それでは、どうやってそのような悪魔の誘惑に打ち勝つことができるのでしょうか。その方法を教えてくださるのが本日のイエス様の姿です。イエス様が示された謙虚さです。主なる神様に対して、自分は人間に過ぎない、という謙虚さです。悪魔の誘惑に打ち勝つのは、自己の強さを示すことではなく、『聖書』からの学びに基づいた、主なる神様の前での謙虚さに他ならないのです。

「申命記」において、主なる神様が、カナンの地に入るイスラエルに求めたのは、そのような謙虚さでした。それは、イスラエルが、自分たちはなぜこのカナンの地で生活を始めるのか、その意味を忘れないためでもあります。イエス様は、宣教を始める時、「**荒れ野の中を『霊』によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けら**」ました。それは、すべての人を救うために宣教という業を行うには、謙虚さが必要だからです。そして、その謙虚さを通した、主なる神様への従順さが不可欠だからでした。

大斎節の40日間とは、教会の教えと信仰において、最も大切である復活の喜びを、より深く心に刻むための期間です。また、その教えと信仰から、わたしたち一人ひとりが、なぜ教会に集められているのか、それをあらためて自覚する時でもあります。『聖書』を通した教会の伝統は、それには40日かかると、わたしたちに求めています。ことにわたしたちは、今、他の多くの教会と同じように、3年目を迎えたコロナ禍の中で、今までとは違う教会の歩みを強いられることを通して、むしろ、新しい教会のあり方を模索しつつ、大斎節を歩もうとしています。そして、復活日を迎えようとしています。今年も、以前行っていたような、大斎プログラムは持てません。しかし、そうだとしても、今までとは異なる『聖書』からの学びを通して、改めてわたしたちが、ここに集められている意味を確認したいと思います。そしてそのことを主なる神様に、謙虚さをもって感謝したいと思います。そして、そのような歩みを通して、わたしたちの教会にとって、変えてはならない大切なものを明らかにしつつ、しかし、新しい歩みに向けて、変えていくべきものが何であるかも、明らかにしていきたいと思えます。わたしたちが謙虚さをもって歩む限り、主なる神様は、わたしたちの歩みを必ず支えてくださいます。そして、わたしたちを通して、主なる神様の意思が、多くの人に伝わります。大斎節の期間を大切にしつつ、主の復活の喜びを待ち望みたいと思えます。